

雪にかこわれて

軒下に足

雪は降ったよお。最近、たいして降らないけどもね、私ら小さい時は。むがしの家だから、そうとう大きいっちゃあ。その上、屋根えまで。うちの前から、雪こうつぶして上がってくから。こんどいっぱい積もるとね、こう階段にして上がってぐのよ。ちょうど家の軒の下、こう歩くのよ。大人の人歩くと、足首しか見えねえのね。こう炬燵あだってて、「あ、今誰か行ったどお、あれ。うっさ来んでねえのかあ」「なんか、向こうさ行った」なんて。

あどねえ、軒端から下がる、垂氷（たろひ）つつったんだ。こうゆんだよ、一抱えもある大きい。大きいね、ずーっと雪の下まで。で垂氷の周囲がね、みんなほれ、凍っているから。「そごさ入んなよ、入んなよ」って、ほらお婆さんたち、騒がれんの。「そこへ入ったら上がられないよ」って。「誰が助けるんだ」って。「死んでしまうよ」って。ほいっだけは、うっんと騒がれてね、そしてそれ、天気の良い時、そのつらら全部おろして、その穴あみな埋めしておくの、大人の人たち。

（『升沢にくらす』 p.213）

冬のほらふき

むかし、冬場はこもりっきり。ほんだから、下の方さなど、ほとんど行がないのね。だから下の方から道ついで、上がってきて、暗くなっで行がんねからさあ、（泊まっていった者が）話題になって、ぐーっと、大きな法螺（ほら）など吹いてかれて、ほいつ真実（ほん）にしたんだ、知らねから、なんにも。通えねんだから、ほれ。鳥っこに話すよもねえもな。社会話したり、新聞あるわけでねえべし、電気あるわけでねえべし。ああ、電話もないし、ラジオもないしだもん。

（『升沢にくらす』 p.221）

雪さまざま

うん、冬だって死人を埋めに行くよお、雪掃って。だから雪掃って行ってえ、こご土葬だったからむかし、ほれ雪さあ、五尺も六尺も降んにいいっちゃ。その晩に土掘っていぐと、おどけでねえがら、土まで行がねえでは、死人を雪さ埋めで、春、出したこどあんだ。一日、掘りつけらんねえはんで。

ああ、むかしほだね、なんもかんも、十尺ぐれえあったつつんだは。こご全部ね、雪んなってさ、こゆな木全部隠れてさは、雪ばりになんだ。ああ、真っ白い銀世界になんだ。なあスキーでどこでもぷっ飛んで歩くのさ。うん、まず乗〔ぬ〕さってね、遊ぶんだ。

こごの雪つつの、降りがいいとき、スキーなどきがねえんだおね。ぬかってっから。うん、ドボーッて入ってっからしゃ、上げんのにかかるは。それぐれえ柔〔やわ〕いんだおね。うん、かんじきだけだ。

そのかわり、春三月になっとさあ、さあ、長靴いっばんで、どこまでも行くにいいんだ、船形山まで。全然〔じえんじえん〕ぬかんなくなつて、春の雪だから。あー、雪固まっからさは。ただ川さけ気い付ければ。みな川、雪掛かってっからね、あっちさ行くど。

（『升沢にくらす』 P.268）